

# 額装された作品（扁額）の修理

藤 枝 宏 治

## はじめに

岸和田の城下に、江戸時代から残る武家屋敷にお住まいの方から、土屋鳳洲（ほうしゅう）の墨書の扁額の修理の依頼を受けました。一般的な修理なので、和額修理の参考になればと手順を紹介します。

此方のお宅には、幕末からの岸和田藩にかかわる人々の掛け軸、額などが多数保存されており、これまでも数点修理してきました。

今回の作者、土屋鳳洲は岸和田藩士の長男として生まれ、岸和田藩の藩校講習館で相馬九方（きゅうほう）に学び、その後講習館の教授になります。維新後は岸和田県が堺県に編入され、堺県師範学校長や奈良師範学校長、華族女学校教授、東洋大学教授などを務め、教育の振興に尽くされたようです。堺市戎之町のご自宅に晩晴書院を開き、漢籍、詩文、修身を教えました。鳳洲の詩文は多く、ときの話題を漢文でうまく表現しています。師の相馬九方は藤澤東暎と深く親交があり、鳳洲もまた藤澤南岳と深く交流した人物であり、泊園書院と少なからずご縁のある人物でした。

なお、「扁額」という名称は、屋外にかける木製の額を意味するものですが、私のまわりの表具屋仲間は、室内の鴨居の上にかける和額を扁額と呼んでいて、他に呼び名が思いつかないので、今回この名前で紹介します。

## 1 修理作品の状態

### 作品寸法

本紙寸法 天地29cm×左右139cm

下地寸法 天地41cm×左右169cm

(1) 墨の膠分がなくなり、墨が粉状化して、一部剥落している。

(2) 乾燥と何らかの衝撃で亀裂が入り、本紙が欠落している。

(3) 下地の組子（くみこ）がゆるんでしまい額がゴソゴソになっている。

## 2 修理仕様と報告

### (1) 膠による剥落止め

額の状態まま剥落止めを行うと、膠の水溶液が乾燥する時、亀裂が入る恐れがあるので、解体してから剥落止めを行いたい。しかし墨の状態が悪く、捲（めく）るとき墨（煤）が飛散しそうなので<sup>(ア)</sup>このまま剥落止めを行った。

筆で膠を塗布するのは不可能なので、スプレーで1.5%の膠を煤が飛ばないように噴霧した。全体に噴霧するので、乾燥時亀裂が入らないよう、台紙（金箔押し）と本紙を切り離しておいた<sup>(イ)</sup>。

全体に塗布したので灰汁の溜まりはできなかつたが、数日後、まだ煤の定着はできていないので、再び膠をスプレーで塗布した。

作品を捲ろうとしたが、煤が面の状態で上がるので筆を用い、2%の膠を塗布した<sup>(ウ)</sup>。重石をかけないと定着しない<sup>(エ)</sup>と思えるので、下地の傷み具合を考慮して塗布の後、化繊紙をあて重石を載せ定着した<sup>(オ)</sup>。

(ア) 写真3のように墨の原料である煤が、膠分がなくなったため粉状化して埃が積もったようになっていた。写真1、2の状況は掃除の時、叩きをかけたりして煤を散らしてしまい、衝撃や乾燥で亀裂したようである。このような状態では、息を吹きかけただけでも煤は飛散してしまう。墨で書かれた墨書の跡も膠がなくなることで、元の白紙に戻っている。今回、筆で膠を塗布すると煤が全て筆に付いてくるため、とりあえずスプレーで止めることにした。

(イ) 乾燥や湿潤を繰り返すたびに本紙が緊張し亀裂が入る。今回のように劣化した状態で水分を全面に与えるのは良くないが、引っ張られないように周りはずした。

(ウ) 煤同士が付いて止まっていたため、筆で撫ぜても付くことはなかった。

(エ) 煤と煤は絡まっているが、支持体である本紙には完全には定着していない。下地から解体して、本紙を作業台の上で重石をかけ押さえられれば問題ないが、元の額の状態で重石を載せ押さえるには、重さで破ってしまわないよう注意した。

(オ) 近年、水分は透過するが、膠や糊などで接着しない化学繊維ができたので、今回のような剥落止めが

可能になった。重石は鉛の散弾を袋に入れ、大きさと重さを書の大きさに合わせて作り使用した。

## (2) 捲り・裏打ち・補彩

本紙の端からヘラ（竹べら）を入れ、台紙が付いた状態で下地から本紙を捲った。

本紙にスプレーで十分に水分を与えた後、レーヨン紙を用いて表打ちした。

数枚の障子紙を水張りした盤板（ばいた・桧材の作業台）上に、表打ちした本紙を乗せて台紙、裏打ち紙を捲った。台紙の鳥の子紙を捲った後、水分を与えて本紙を動かし亀裂部分を元に戻した。

元の肌裏紙はほぼ捲れたが、肌裏紙の劣化が激しく、一部捲れず残した（カ）。

欠落部分に補修紙を充てて繕った。

古色を付けた美濃紙で肌裏打ちを施し、素干した。

厚めの美濃紙で二度増裏打ちを施し、仮張りした。

補修紙に補彩をした。一部亀裂部分に絵の具で補彩した（キ）。

（カ）美濃紙で裏打ちされていたのだろうが、劣化した肌裏紙の繊維をピンセットでつまもうとするがつまめず本紙に傷をつけるので、捲れない元の肌裏紙は少し残すことにした。

（キ）補修紙の部分に古色を付け、本紙の地色に合わせた。所蔵者からは、墨の剥落部分に補彩をというご依頼であったが、作品の雰囲気が変わると説明し、行わないこととした。亀裂の細かい傷の部分には傷が目立つので補彩した。墨では照りが出るので、絵の具を使った。

## (3) 下地・台紙・仕上げ

元の下地は劣化して痩せていたので、下地、椽（ふち）を新調した。

下地には、骨縛り、胴張り、糞かけ、糞縛りの下張りを施した。途中、釘締（くぎしめ）も行った（ク）。

台紙は鳥の子紙に砂子を振り、古色を付けた。

泛け（うけ）張りをかけ、表に台紙、裏に花色紙を張った。

全体に水糊と周りに堅糊を付け台紙に本紙を張った（ケ）。

十分な乾燥の後、前面にアクリル板を入れ仕

上げた。

（ク）下地は外側四方の框（かまち）と、中の細い組子を木釘で打ち付け、四隅に隅板を入れ作られている。今回下地が大きいので、屏風や襖と同様の下張りをした。6層の下張りであるが、これによって下地の骨組みが締めしつかりした強度を保てた。下張りの仕組みは、骨組みの経年によるくわいが表面の本紙に直接影響しないよう考えられたもので、次の泛け張りは本紙が緊張したときに引かれる力が分散するように考えられたものである。

釘締とは糊の水分などで緩みかけた組子を木釘を叩き締める作業である。

（ケ）小さな作品は全体に水をして廻りに糊を付け張るが、今回作品が大きいので、全面台紙に付いているように水糊で張った。乾燥時、台紙ごと引っ張られ、泛け張りで力が分散されるよう考えた。

## おわりに

今回のような、墨が粉状化した額の修理を時々預かる。潮風の当たる風通しの良いところに掛けられていた額にはよくあると聞いたが、そればかりではなさそうだ。

昔、海外へ流失した文化財になるような古い掛け軸を、展示しやすいように軸装から額装に表装し直したところ、作品の劣化が進み、再び軸装に戻しているという話を聞いたことがある。絵具、墨、支持体である紙、絹、いろいろな劣化が考えられるが、日本のように湿度が比較的高いところと、欧米のような乾燥したところでは、保存の方法は変わってくると思う。

墨の話では、或る書家との会話の中で、古い墨は少し膠を足して使った方がいい場合があり、中国の名墨もそうして使っていると聞いたことがある。

修理に使う膠の話になるが、つい最近までは、牛膠（三千本、粒膠）、鹿膠、ウサギ膠等が主なものであったが、最近では同じ牛皮の膠でも、部位、抽出方法（時間、温度）など、いろいろ研究されて、接着力の強い膠や浸透性のある膠、透明感があり色を汚さない膠が製造されている。

肌裏打ちに使われる紙について考えると、やはりしっかりした薄口の美濃紙で裏打ちされた作品は、安全に美しく修理できる。安価な紙で裏打ちされたものは、捲るとき作品を傷つける恐れがあり、また捲れないまま裏打ちを重ねることとなると、将来的に作品の欠

落を招いてしまう。

今回、亀裂が入った原因は経年劣化によるもので間違いはないが、写真1にみられるように、本紙は周りの糊だけで張られており、台紙や泛け紙（うけがみ）と全面接着されていなかった。これだけ大きな本紙は水糊で全面張り付けた方が、引っ張られる力が分散してよいと思う。

仕上げにアクリル板を入れると、鑑賞に少し障害が出るが、衝撃による破損対策だけではな

く、本紙、絵具、墨、などの劣化防止には必要だろうと思う。

【参考】「明治の教育界に足跡を残した土屋弘（つちやひろし）」『ミニ岸和田再発見第18弾』（岸和田市立図書館）  
<https://www.city.kishiwada.osaka.jp/site/toshokan/mini-18.html>（2024年8月30日閲覧）

藤枝春月 代表

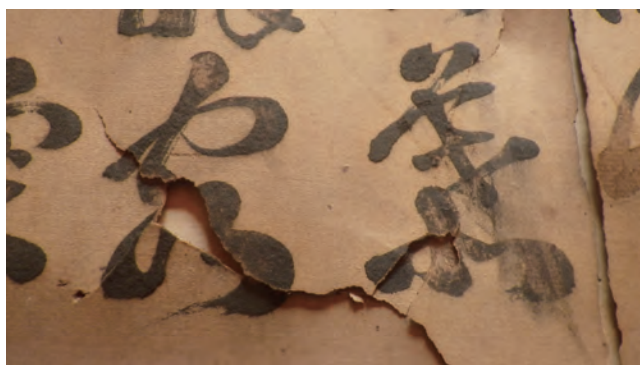


写真1 修理前 (1)

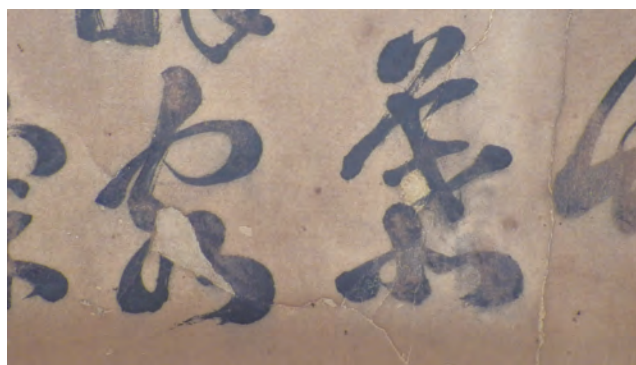


写真4 修理後 (1)

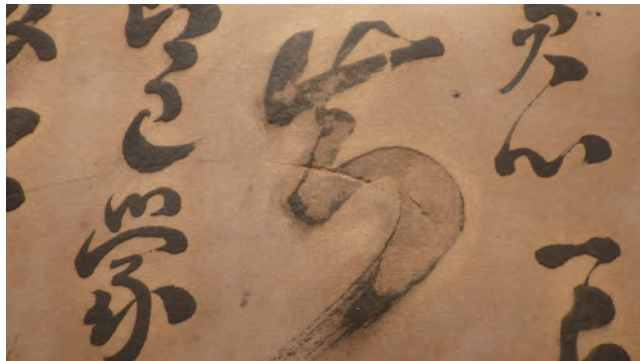


写真2 修理前 (2)

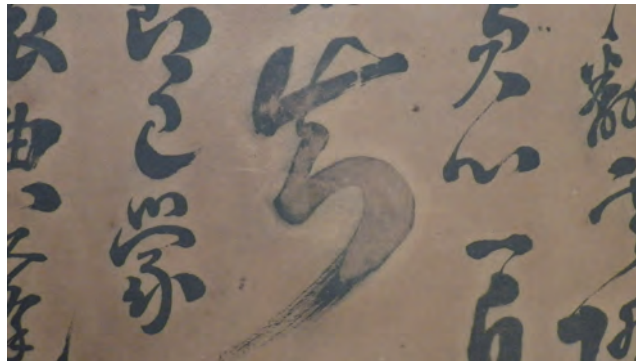


写真5 修理後 (2)



写真3 修理前 (3)



写真6 修理後 (3)